

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780093

研究課題名(和文)現代民主主義論における規範性の再定位 自由主義思想を手掛かりとして

研究課題名(英文)A New Orientation of Normativity in Contemporary Democratic Theories

研究代表者

山本 圭(Kei, Yamamoto)

立命館大学・法学部・准教授

研究者番号：90720798

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、民主主義原理から切り離された自由主義原理を、再度デモクラシー論に「節合」することで、デモクラシー理論に規範性を取り戻すことである。近代デモクラシーは異質な二つの原理、すなわち、差異と自由を重視する「自由主義的原理」と同一性と平等を強調する「民主主義的原理」から構成されている。しかし現代民主主義論、特に「ラディカル・デモクラシー論」は、このうち後者の民主主義的原理を過度に強調してきたために、自由主義的な価値観と対立し、何を望ましいとするかの「規範性」を喪失するというジレンマに陥っている。本研究はこの問題を解決するために、二つの原理を再度和解させることを試みてきた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to restore normativity to democracy theories by "articulating" the liberal principle separated from the democratic principle again. Modern democracy consists of two different principles, "liberal principle" which emphasizes differences and freedoms, and "democratic principle" emphasizing identity and equality. But modern democratic theory, especially "radical democracy", since it has emphasized the latter democratic principle of this, conflicts with the liberal sense of values, and therefore it has fallen into a dilemma in which we can not choose what is desirable with certainty. In order to solve this problem, this research has attempted to reconcile two principles.

研究分野：現代政治理論・民主主義論

キーワード：ラディカル・デモクラシー ポスト基礎づけ主義 エルネスト・ラクラウ シャンタル・ムフ ポピュリズム

1. 研究開始当初の背景

カール・シュミットが指摘したように、一般に「近代民主主義」は二つの異質な原理が結合したものと考えられる。シュミットは、近代デモクラシーを「自由主義」と「民主主義」という異質な思想の混合物として捉え、前者の産物である議会主義を廃し、同質性に基づく民主主義を実現することを主張したことはよく知られていよう。(Die geistesgeschichtliche Lage des heutigen Parlamentarismus) 同様に、C.B. マクファーンやシャントル・ムフのような政治理論家もまた、リベラル・デモクラシーが差異と自由を重視する「自由主義的原理」と人民の同一性と平等を強調する「民主主義的原理」から構成されたものであることを主張してきた。

このような見方からすれば、ラディカル・デモクラシーはこのうち「民主主義の原理」を自覚的に引き受け、字義通り民主主義を「根源化」するものとして位置付けることができる。晩年のラクラウ、および近年のムフが「ポピュリズム」こそ民主主義的であるとしているのはこのためである。申請者はこれまで、既存の政治空間へのポピュリズム的介入に民主主義の可能性を見るラクラウの理論の重要性を提起してきた(Laclau, *On Populist Reason*, 2005)。

2. 研究の目的

しかし、ラディカル・デモクラシーの「民主主義的原理」の過度の強調は、デモクラシーの「規範性」をめぐる問題を引き起こしている。たとえばクレイグ・キャルホーンは、「新しい社会運動」の理論家が自分たちにとって「魅力的に」映る社会運動だけを評価の対象とし、宗教的なニューライト、原理主義、人種主義などの運動を無視していることを批判している(Calhoun, *Critical Social Theory*, 1995)。言うまでもなく、これらの運動もまた市民参加と現状への変革要求という点で、新しい社会運動としての資格を満たしているはずである。にもかかわらず、これらの研究者らは社会運動論からこれらの運動を恣意的に排除してきたのである。

この排除の暗黙の基準は何だろうか。いかにして「規範的に望ましい運動」と「そうでない運動」を区分できるのか。これはラディカル・デモクラシー論の問題でもある。たとえばラクラウのように、デモクラシーをポピュリズムと同一視すれば、その「人民の声」が規範的に望ましいか否かは、民主主義原理の関心事にはなりえない。しかしそうすると、マイノリティの権利の拡張を訴える運動も、マイノリティへのヘイトスピーチを繰り返す運動も等しく「民主主義的」であることになるというジレンマに直面する。したがって問題は、ラディカル・デモクラシー論はいかにして「規範性」を担保できるのか、ということになる(Critchley, "Is There a

Normative Deficit in the Theory of Hegemony?" 2004)。これこそ、ラディカル・デモクラシー以後の民主主義研究者が直面する新しい課題なのである。

そこで本研究の目的は、民主主義原理から切り離された自由主義原理を、再度デモクラシー論に「節合」することで、デモクラシー理論に規範性を取り戻すことである。近代デモクラシーは異質な二つの原理、すなわち、差異と自由を重視する「自由主義的原理」と同一性と平等を強調する「民主主義的原理」から構成されている。しかし現代民主主義論、特に「ラディカル・デモクラシー論」は、このうち後者の民主主義的原理を過度に強調してきたために、自由主義的な価値観と対立し、何を望ましいとするかの「規範性」を喪失するというジレンマに陥っている。本研究はこの問題を解決するために、二つの原理を再度和解させることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、民主主義的原理と自由主義的原理を再節合し、現代民主主義理論に規範性を回復することである。具体的な方法としては、文献・資料などの蒐集、読解、そして定期的に学会報告および論文の投稿を行ないつつ、適宜成果を公表して行く。

国内研究者と研究会などを定期的に関き、適宜情報交換につとめる。また海外の研究者との連携も積極的に行い、国際的なネットワークを構築する。

4. 研究成果

本研究は、「基礎づけ」をいかにして捉えるかという問題に逢着する。すなわち、たんに基礎づけを放棄するのでは十分でなく、新しい基礎づけとの関係を要請するだろう。この課題に取り組んでいるのがOliver Marchart, *Post-Foucaultian Political Thought* (Edinburgh University Press) である。ここでマーシャルトは、一時的で暫定的、不変的でない基礎づけの存在を認める「ポスト基礎づけ主義」という立場を打ち出している。唯一にして絶対な基礎づけを素朴に前提できない時代にあって、いかに基礎づけ主義への回帰を警戒しつつ、同時に反基礎づけ主義にも居直ることなしに社会の最小限の土台を確保しうるか、これがポスト基礎づけ主義の課題なのである。

マーシャルトの問題提起をさらに発展させ、本研究では「真実らしさ verisimilitude」のロジックに注目した。真理の外観はヘゲモニーの産物であり、そのかぎりでは、「真実らしさ」は他の構想による挑戦にたえず曝されている。そのため、ラクラウ＝ムフがある箇所ですべて述べているように、「真実らしさ」のロジックには「本来的に公共的で民主主義的」などところがある。ただし、ポスト・トゥルースとも言われる時代にあって、いわゆる「嘘」と「真実らしさ」の違いについては、

ひきつづき注意深く検討される必要があるだろう。(研究成果を学術書の論集として刊行予定。)

第二に、本研究は、民主主義とリベラルな規範との結節点として近年注目される「左派ポピュリズム」の再検討を行った。昨今の欧州などにおける極右ポピュリズムの台頭もあり、ポピュリズムは、社会に分断や排除を生み出し、リベラル・デモクラシーを毀損するものとして、政治学者のあいだではあまり評判の良くない概念である。しかし、シャンタル・ムフやヤニス・スタヴラカキスのような論客は、ポピュリズムに現代民主主義を根源化する可能性を見出し、それを一定のリベラルな諸原理と節合することで「左派ポピュリズム」という立場を精力的に展開している。それは排除された人々やマイノリティの包摂を可能にするポピュリズムのあり方である。ポピュリズムは人々のつながりを分断するのみならず、非本質主義的な紐帯を創出する大きな手がかりになるのである。(本研究成果は、「ポスト・ネイションの紐帯のために」(『つながりの現代思想』明石書店、2018年4月)として、執筆された。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

- 山本圭「嫉妬・正義・民主主義」『ニクス』第4号、pp.250-261、2017、査読無
- 山本圭「傍流の位置から」『現代思想』(45:11) pp.270-277、2017、査読無
- 山本圭「It's the Populism, Stupid!」『現代思想』(45:1) pp.183-189、2016、査読無
- 山本圭「不審と敵対」『現代思想』(43:14) pp.212-219、2015、査読無
- 山本圭「政治的オプテミストの弁明」『現代思想』(43:11) pp.120-131、2015、査読無
- 山本圭「ポケットに民主主義を」『POSSE』25巻、pp.112-117、2014、査読無
- 山本圭「デモクラシーと規範」『社会と倫理』29巻、pp.67-79、2014、査読無

[学会発表](計 4 件)

- 山本圭「なぜ民主主義論は精神分析を必要とするのか?」第42回社会思想史学会、2017
- 山本圭「ハンナ・アーレントはデモクラットになったのか?」第15回アーレント研究大会、2016
- 山本圭「現代革命の憤み深さ?」日本政治学会2015年研究大会、2015
- 山本圭「Populism in Question」, Contemporary Democratic Theory International Workshop、2015

[図書](計 7 件)

- 山本圭・松本卓也訳、ヤニス・スタヴラカキス『ラカニアン・レフト』、岩波書店、2017、464
- 山本圭、『不審者のデモクラシー』、岩波書店、2016、304
- 山崎望・山本圭編、『ポスト代表制の政治学』308(149-178)、ナカニシヤ出版、2015
- 市野川容孝・渋谷望編(山本圭)『労働と思想』512(321-338)、堀之内出版、2015
- エルネスト・ラクラウ(山本圭訳)『現代革命の新たな考察』、法政大学出版局、400、2014
- 高橋良輔・大庭弘継編(山本圭)『国際政治のモラル・アポリア』368(217)、ナカニシヤ出版、2014
- 仲正昌樹編(山本圭)『現代社会思想の海図』258(185-197)、法律文化社、2014

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 圭 (YAMAMOTO, Kei)
立命館大学・法学部・准教授
研究者番号: 90720798

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()